

# ブツダグヒヤのタントリズム

## —8世紀・チベットの仏教統制の一事情—

山本匠一郎

### はじめに

ブツダグヒヤは8世紀のインド後期大乘仏教（密教）の学匠である。彼の生存年代は正確にはわからないが、およそ8世紀後半を活動のピークとしたものと推測される。ブツダグヒヤの密教がチベットに招請された時代は、史書によれば2説があり、ティデツクツェン王（704-754）か、ティソンデツェン王（742-797?）の時代とされる。越智淳仁氏の研究<sup>1)</sup>によれば、前者を説く史書群は『バシエ』<sup>2)</sup>の記述に基づき、後者を説く史書群は『ブツダグヒヤの書簡』（Toh4194 / Ota5693）の記述に基づく。越智氏はこれらの記述に関して、ブツダグヒヤの著作の奥書（colophon）を参照することにより、後者の記述に史的根拠の妥当性を認め、ブツダグヒヤの活動期を8世紀後半としている<sup>3)</sup>。

ここではブツダグヒヤの著作に見られるタントラ分類法や、引用する密教経典を参照し、8世紀後半におけるチベットという時代状況のなかで、彼の密教がどのように受容され、いかなる変容が生じていたかについて考えてみたい。

### ブツダグヒヤの資料

ブツダグヒヤに関する史料はすべて後代に属するもので信憑性に乏しいが、その著・訳は多く残されており、それらがもっとも雄弁に彼自身を語っていると言える。著作は24あり、さらに加えて、ニンマ派資料の中にブツダグヒヤの翻訳がある。これらの資料を分類すれば、次のようになる<sup>4)</sup>。

#### A. 所作タントラの注釈類

## ブツダグヒヤのタントリズム (山本)

- ①『上禅定品広釈』(Toh2670 / Ota3495)
- ②『蘇婆呼童子請問経略釈』(Toh2671 / Ota3496)
- ③『金剛摧壞陀羅尼広註宝明』(Toh2680 / Ota3504)
- ④『金剛摧壞陀羅尼成就法一勇者成就』(Toh2926 / Ota3751)
- ⑤『金剛摧壞陀羅尼供養儀軌次第』(Toh2927 / Ota3752)
- ⑥『金剛摧壞沐浴儀軌』(Toh2929 / Ota3755)

## B. 『大日経』注釈

- ⑦『大日経略釈』(Toh2662 / Ota3486)
- ⑧『大日経広釈』(*Bhāṣya*) (Toh2663 / Ota3487)
- ⑧A『大日経広釈』(*Vṛtti*) (Toh2663A / Ota3490)

## C. 瑜伽タントラ注釈類

- ⑨『悪趣清浄義字釈』(Toh2624 / Ota3451)
- ⑩『一切悪趣清浄曼荼羅儀軌次第』(Toh2636 / Ota3461)
- ⑪『タントラ義入』(Toh2501 / Ota3324)

## D. 秘密蔵注釈類

- ⑫『灌頂義決択』(Toh4634 / Ota4722)
- ⑬『金剛薩埵幻化網光明次第』(Toh4643 / Ota4731)
- ⑭『道莊嚴』(Toh4648 / Ota4736)
- ⑮『心滴論』(Toh4650 / Ota4738)
- ⑯『金剛薩埵幻化網タントラ吉祥秘密蔵眼釈』(Toh4668 / Ota4756)
- ⑰『忿怒幻化灌頂曼荼羅金剛業次第』(Toh4673 / Ota4761)
- ⑱『幻化灌頂根本広釈』(Toh4674 / Ota4762)

## E. その他

- ⑲『瑜伽分別除障』(Toh2456 / Ota3284, 5449)
- ⑳『吉祥金剛手成就法』(Toh2865 / Ota3687)
- ㉑『業方便』(Toh2928 / Ota3754)
- ㉒『曼荼羅法略撰』(Toh3705 / Ota4528)
- ㉓『曼荼羅作法儀軌』(Toh3761 / Ota4581, 5439)
- ㉔『チベット王と人民への師の書簡』(Toh4194 / Ota5693)

## ブツダグヒヤ所説の經典カテゴリー

上記のブツダグヒヤの資料は經典成立史論的な視点から分類したものである。これらの著作のほかに、その中に引用される典籍、及び思想をも射程に入れなくてはならない。ここではブツダグヒヤの諸注釈に見出されるタントラ分類法を参照してみたい。そのカテゴリーはそれぞれの著作において少しずつ異なる。それを整理すれば以下のようになる。

### 1. 『大日経略釈』(D.3a-b / P.4a-b)

波羅蜜門	波羅蜜行	：十地経、宝雲経、無尽意経
	甚深廣大	：三昧王経、華嚴経（入法界品）、般若経
真言門	所作タントラ	：底哩三昧耶経、三身頂髻（悪趣清浄?）、金剛手灌頂経、大日経
	瑜伽タントラ	：真実撰経、吉祥勝初

### 2. 『大日経広釈』(Bhāṣya, D.65a-b / P.77a-b)

波羅蜜門	有所得	：律・経蔵、アビダルマ、長者勇施請問経など
	甚深廣大	：華嚴経（入法界品）、十地経、三昧王経
真言門	有所得	：蘇悉地経、持明蔵等の所作タントラ
	ウバヤタントラ	：大日経（瑜伽タントラでもある）
	甚深廣大	：真実撰経

### 3. 『上禅定品広釈』(D.3a / P.3b, D.9b / P.12b)

所作タントラ	蘇悉地経、蘇婆呼経、吉祥儀軌集、金剛頂髻経、上禅定品
個別タントラ	大日経、金剛手灌頂経、菩提場経、持明蔵
瑜伽タントラ	真実撰経、金剛頂経

### 4. 『タントラ義入』

瑜伽タントラ	真実撰経、吉祥勝初、超勝三界経、金剛頂経、一切儀軌集
--------	----------------------------

——すでにその大乘經典との関わりから見たブツダグヒヤの教学背景について

## ブツダグヒヤのタントリズム (山本)

ては考察したことがあるので<sup>5)</sup>、ここでは彼の密教經典の分類法に注目してみよう。彼のタントラ分類法は主として所作と瑜伽タントラの二分法を用い、かつ二分法から三分法への過渡期の分類法とされる<sup>6)</sup>。その分類上の問題点を指摘してみよう。

- (1) 『大日経』は、所作タントラ、瑜伽タントラ、ウバヤタントラ、個別<sup>7)</sup>タントラに分類される(ちなみに後世の「行タントラ」という呼称は用いていない)。
- (2) 『金剛手灌頂タントラ』は所作タントラ、または個別タントラに分類される。
- (3) 『三身頂髻』は『悪趣清浄タントラ』と考えられる<sup>8)</sup>。これは一般に瑜伽タントラに分類されるが、ブツダグヒヤは所作タントラに分類する。
- (4) 『吉祥儀軌集』と『一切儀軌集』は同じタントラを指すと思われるが、所作タントラ、または瑜伽タントラに分類される。

——上記の分類上の問題点をうかがうに後世においてみられるタントラ分類法(四種・五種・七種タントラなど)をブツダグヒヤは考えていないことがわかる。またタントラを分類するという意識がそこに見られていたかどうかさえ疑問なほど、曖昧な分類をしており、1つの經典はカテゴリー間を自由に行き来している。また後世確立された分類法とはおよそ異なる分類をしている。『大日経』についていえば、後世におけるタントラ分類法は行(caryā)タントラとするが、ブツダグヒヤはそういう呼称を用いず、各注釈書において、所作・瑜伽・ウバヤ・個別タントラと、ブツダグヒヤが用いるすべてのタントラ分類に『大日経』を配当している。これはいまだブツダグヒヤの時代、インドにおいて密教經典の分類が確定・整理されていなかったということ、さらに1つのタントラにさまざまな要素があると理解されていたことを意味する。

『一切儀軌集』(*Sarvakalpasamuccaya*) について

ここで先行研究<sup>9)</sup>に基づいて、分類上の問題点の第4に挙げた『一切儀軌集』について考察したい。『一切儀軌集』というタントラに焦点をあてることで、

ブツダグヒヤの密教がどのように受容されていたかをうかがい知ることができる。このタントラに言及するブツダグヒヤの記述を、以下にごく短い要文だけ示しておく。

(1) 『上禪定品広釈』

- a. 「あらゆる所作タントラの一般の儀軌を集めたタントラである『聖蘇悉地経』と『蘇婆呼経』と『吉祥儀軌集』等と……」(D.9a / P.11b)
- b. 「『吉祥儀軌集』の中に、法無我そのものを学ぶべきこと、本尊瑜伽に関する経文は甚だ多く示されているからここには記さない。」(D.9b / P.12b)

(2) 『タントラ義入』

- a. 「一切の瑜伽タントラの密意を釈した『一切儀軌集』の中にも……」(D.10a / P.12a)<sup>10)</sup>
- b. 「『一切儀軌集』の中には、満月輪上に、第二の満月を修習することを説いており…」(D.16b / P.18b)<sup>11)</sup>
- c. 「『一切儀軌集』の「護摩法」の中には、……」(D.84a / P.90a)<sup>12)</sup>

——『タントラ義入』に引用される『一切儀軌集』というタントラは、酒井真典博士が金剛頂十八会中の第三会「一切教集瑜伽」に比定したタントラで、現存の『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』(*Vajrasēkharamahāguhyayogatantra*, Toh480 / Ota113)の前半部に相当し、その後半部は第二会「一切如来秘密王瑜伽」に相当すると推定される、『真実撰経』の釈タントラである<sup>13)</sup>。現存する『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』は、それら成立基盤の異なる2つのタントラを後世に編集した上で1つにまとめたものである<sup>14)</sup>。ブツダグヒヤは前者を『一切儀軌集』、後者を『金剛頂タントラ』と称し呼び分けており、ブツダグヒヤの時代(8世紀後半)、さらにアティーシャの時代(11世紀頃)においても<sup>15)</sup>、なお両者は別行のタントラとしてインドに存在していたが、それらは現存していない。だが『タントラ義入』に引用される『一切儀軌集』の文はすべて現存の『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』中に見出される。

ペーツェク作『デンカルマ目録』(Toh4364 / Ota5831)の「真言タントラ部」(D.301a / P.361b)に『一切儀軌集』と思われるタントラを載せている。その

ブツダグヒヤのタントリズム (山本)

「真言タントラ部」の内容を見てみよう<sup>16)</sup>。

真言タントラ部

『聖不空羅索大儀軌』 7800 偈 26 巻以上

『聖最勝明経』 4500 偈 15 巻

『聖金剛手灌頂タントラ』 3600 偈 12 巻

『一切タントラ集』 12 巻<sup>17)</sup>

『聖蘇悉地経』 2100 偈 7 巻

『聖大日経』 1950 偈 6 巻 150 偈

その注釈 阿闍梨ブツダグヒヤ作 2300 偈 7 巻 200 偈

『聖一切悪趣清浄威光王儀軌』 700 偈 2 巻 100 偈

その注釈 阿闍梨ブツダグヒヤ作 3000 偈 10 巻

『聖蘇婆呼請問経』 350 偈 1 巻 50 偈

その注釈 500 偈 5 巻

『聖上禅定品』 110 偈

その注釈 阿闍梨ブツダグヒヤ作 900 偈 3 巻

——ここでは9聖典、4注釈の合計13点を記すのみだが、ここに記される4注釈(『大日経略釈』、『悪趣清浄タントラ義釈』、『蘇婆呼童子請問経略釈』、『上禅定品広釈』)がすべてブツダグヒヤ作である。『デンカルマ目録』の中にブツダグヒヤの密教が典型的に示されていると言える。裏を返せばこの『デンカルマ目録』に示された密教が、当時のチベット仏教が受容しうる密教の限界点、すなわちどこまでブツダグヒヤの密教を受容しえるかを示していると言えよう。

上記の9聖典のうち『一切タントラ集』のみが現存していない。これはブツダグヒヤと同時代に Mañju が翻訳したと、チベットの史書『賢者の宴』(Mkhas pa'i dga ston) は伝えるが<sup>18)</sup>、後世散佚したものであろう、これのみが現存していない。ペーツェクの『デンカルマ目録』中の「真言タントラ」部分は、そのほとんどがブツダグヒヤの密教について示唆するものであるが、しかるにそこに記された『一切タントラ集』だけがなぜ西藏大蔵経中に残っていないのか。

『デンカルマ目録』中に記された『一切タントラ集』(rGyud kun las bdus pa)

と、ブツダグヒヤが『上禪定品広釈』で指摘する『吉祥儀軌集』(*dPal rtog pa bsdus pa*)と、『タントラ義入』で引用する『一切儀軌集』(*rTog pa thams cad bsdus pa*)、これらはすべて同じタントラを指示するものではなかろうか。資料が少ない中での断定は避けなくてはならないが、すでに酒井真典博士<sup>19)</sup>が示唆したごとく、これらは同じタントラ（または近接するタントラ）を指示するものと推測される。『デンカルマ目録』についていえば、その目録記載の密教経典類がほとんどブツダグヒヤの密教を示唆するものであるし、ブツダグヒヤが援用する経典類から推測するかぎりこの『一切タントラ集』というタントラが『一切儀軌集』を指示する可能性は高い。『上禪定品広釈』のいう『吉祥儀軌集』が『一切儀軌集』に直結するかどうかは引用文が見出されないので不明というほかない。このタントラが所作タントラに分類され、かつ本尊瑜伽を体系的に説くとされるのは、タントラの性格としてあまりにもありふれたもので、『一切儀軌集』の性格と結びつくようできて直結するものではない。ここはやはり『吉祥儀軌集』というタントラが別に存在したと考えるべきであろうか。決め手はないが、『儀軌集』(*Kalpasmuccaya*)と呼ばれるタントラがブツダグヒヤのタントリズムに非常に有力な本尊瑜伽の理解を提供していたということだけは指摘できる。よしんばこれらがすべて異なるタントラであったとしても、ブツダグヒヤの密教理解に密接に関わりながら、その輪郭が不鮮明なタントラがあったことを、どのように捉えるべきであろうか。

当時のチベットでは密教経典（とくに瑜伽タントラ）の翻訳が規制されていたと考えられる。チベットの史書が伝えるところでは、ブツダグヒヤは『タントラ義入』、『大日経略釈』、『上禪定品広釈』の3著作を寄贈したと明らかに伝えるが、『真実撰経』とその釈である『タントラ義入』は『デンカルマ目録』には記載されていない。瑜伽タントラが一律に却下されているわけではなく、たとえば『悪趣清浄タントラ』はそのブツダグヒヤの注釈とともに翻訳されている。しかし『悪趣清浄タントラ』が当時に瑜伽タントラと認識されていたかどうかは疑わしく、先のカテゴリーで見たようにブツダグヒヤは所作タントラと認識していたものではなかろうか。また『悪趣清浄タントラ』については、羽田野伯猷博士がいうように悪趣・罪障を清めるという経典の性格が「チベット人の志向に適合した」<sup>20)</sup>という面も考慮されよう。『一切儀軌集』は先のカテゴリーでも見たように、所作タントラ（または瑜伽タントラ）に分類され、当初

## ブツダグヒヤのタントリズム (山本)

それは翻訳を予定されたが、後に却下されたものと考えられないだろうか。『一切儀軌集』は性的瑜伽を説き無上瑜伽(母)タントラと何らかの交渉を伴っていたタントラであるとされる(『タントラ義入』では性的瑜伽を説く部分は回避されている)<sup>21)</sup>。そうした無上瑜伽的側面を持つタントラを多く引用する点が、『タントラ義入』(さらには『真実撰経』)の訳出が『デンカルマ目録』にリストされなかった理由の1つと考えられる。またそこで引用される『一切儀軌集』や『金剛頂タントラ』が翻訳されなかったのも当然であると言えよう。また『上禅定品広釈』に依拠すれば、それは「法無我の修習による本尊瑜伽」を主題とするタントラであったことが窺える。おそらく『一切儀軌集』は、そのいわば「頓門」的な性格が密教經典統制の法令に違反したのではないであろうか。ブツダグヒヤのこの部分に関する密教は、チベット王室仏教の統制に触れた可能性が強い。

およそこのタントラについて、次のような歴史的経緯があると推定できる。

- (1) 8世紀半までに『一切儀軌集』及び『金剛頂タントラ』の原初的形態が成立

不空訳『金剛頂經瑜伽十八會指歸』中に引用される(大正18, 286a-b)

第二会 = 『金剛頂タントラ』の原初的形態

第三会 = 『一切儀軌集』の原初的形態

- (2) 8世紀後半 ブツダグヒヤの『タントラ義入』に引用
- (3) 9世紀前半 ペーツェク『デンカルマ目録』(824/836)に『一切タントラ集』として記載される。またそれを Mañju が翻訳する
- (4) 11世紀頃 アティーシャ(982-1054)の『菩提道灯細疏』中に引用  
儀軌タントラとしての『一切儀軌集』  
瑜伽タントラとしての『金剛頂タントラ』
- (5) 年代不詳 散佚と再編集  
Mañju 訳『一切儀軌集』は散佚し、『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』(Toh480 / Ota113)として、『一切儀軌集』と『金剛頂タントラ』が合揉・編集され、チベット訳される

——不空訳『十八会指歸』は後期密教叢書群の原初的形態を示唆するものであ

り、その十八会中の第二会『金剛頂タントラ』、第三会『一切儀軌集』は初会『金剛頂経』（『真実撰経』）の釈タントラとして成立した。ブツダグヒヤは『タントラ義入』で両者と呼び分けるが、その引用はすべて現存の『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』に見出されることから、両者は別行とはいえ、密接な関係のもとにあったことが推察される。この二つのタントラはブツダグヒヤによって依用され、その重要性は当時の有力な訳経僧パーツェクにも認識されていたが、おそらくその性的瑜伽を説く面が災いして、不完全な形のまま放置されてしまったのであろう、ついに散佚してしまった。8世紀半には成立したこの二つのタントラが、二つながら併行して、別個にインドにおいて存在し、チベット訳され、やがて散佚し、一つに編集されるという複雑な経緯があることがわかる。

## 当時の仏教流通状況

8世紀後半におけるチベットの状況は、すでに半世紀に及ぶ中国との軍事的な衝突と和平との繰り返しにより終止符が打たれ、国政の安定と新しい文化の導入に力を注ぎはじめた時期である。仏教はいよいよ国教化され（791）、中国仏教を退けインド仏教を採用し、それを本格的に導入し始めていた。

だが当時のチベット仏教前伝期における仏教流通の状況はいまだ混乱していた。まずシャーンタラクシタによる教判の確定がなされ、地域信仰のボン教との争いに際してはパドマサンバヴァの露払いを必要とした。さらに他宗のみならず仏教内部における争論、いわゆるサムイエ宗論（シャーンタラクシタ、カマラシーラ vs 摩訶衍）があり、チベット仏教は頓門派・漸門派の二者択一的な状況にあった。その論争のさなかでシャーンタラクシタは不慮の死を遂げ（783）、論争に勝利したカマラシーラも殺害されることになる（797）。ブツダグヒヤのチベット王への書簡において、「チベットに行けば命の保証はない」と文殊菩薩から教示を受けたというのは、うがった見方をするならばそのような時代状況を告げているのかもしれない。また彼の弟子にヴィマラミトラ<sup>22)</sup>がいる。ニンマ派の祖とされるヴィマラミトラは、サムイエの論争に会して、インド仏教者としてありながらも頓門派の側に親しかつたとされ、彼は入蔵10年あまりで中国へ去ったと伝えられている（797）。しかしそれは頓門派というのではなく、自己と本尊とに差別を設けないという意味での「即身成仏」を説いた側

## ブツダグヒヤのタントリズム (山本)

面が、頓門派と見なされたものではなかろうか。そしてその点においてはブツダグヒヤの密教もまたいわゆる「正統」とは抵触する側面もあったと思われる。サムイェ宗論は、しばしばインド仏教（漸門派）対中国仏教（頓門派）という構図で語られるが、むしろそれは大乘仏教の2つの実践道を代表するものであったと考えられる。すなわち前者は僧院の中で伝統的・基本的な大乘教学を修める修道僧の系統であり、後者は僧団の外で必ずしも仏教の伝統にとらわれずに自由な宗教儀礼を行うヨーギンの系統である<sup>23)</sup>。

ブツダグヒヤはいわゆる仏教タントリストとしてありながら、基本的な仏教学を修めた学匠であり、その教学は8世紀のインドにおける後期大乘教学<sup>24)</sup>を背景としている。しかしながら彼にはそのような正統的側面と、いまだ把握しきれない異端的側面とが共存している。彼の引用する文献の中には、上記のタントラ分類に属さない文献も含まれており、就中ニンマ派文献中には、おそらくブツダグヒヤに仮託されたと思われるが、彼によって翻訳された密教経典が存在する<sup>25)</sup>。これらを単にニンマ文献であるという理由のみで排除するならば、後世に西藏大蔵経に編入されたニンマ文献ももちろん彼の著作とは見なすことはできない。後世の仏典編纂者が彼の著作と見なしている以上は何らかの影響を与えたものではないかと推測してみることも必要であろう。チベット仏教前伝期の密教は、多くニンマ派につながる密教と非常に近い関係を持つことが指摘されている<sup>26)</sup>。

一般に無上瑜伽・後期密教タントラは、すでに8世紀当時のインドにおいて成立していたと推測されている。しかしながらその後期密教タントラを当時のインド仏教の学匠たちが参照していたという積極的な証拠はあまり見出すことができない<sup>27)</sup>。その点についてはブツダグヒヤもまた同様である。しかしながら論著中に引用が見出されないということをもって、ブツダグヒヤが後期密教タントラを知見していなかったとは必ずしも言い切れない。すでにかつて指摘したことがあるように、ブツダグヒヤは『サマーヨーガタントラ』という無上瑜伽(母)タントラと見られるタントラを知見していたことも窺える<sup>28)</sup>。その密教はいちじるしく「頓門」的性格を持ちながら、巧みに隠されている。

## まとめ

ブツダグヒヤのタントラ分類法を参照し、『一切儀軌集』というタントラを中心に彼のタントリズムがどのように受容されたかを見た。ブツダグヒヤの密教は、『大日経』、『真実撰経』などを中心とする中期密教であったにはちがいないが、また同時にその密教は後期密教タントリズムの萌芽を宿したものであったと推察される。それはブツダグヒヤがわずかに提示する瑜伽タントラにおいて示され、そこに彼が理解したタントリズムの極点が示されている。またそれらは無上瑜伽タントラと何らかの関わりを持っていたと推測される。

8世紀のチベットではタントラ文献を翻訳したり、あからさまにタントリズムを称揚したりすることが許されなかった。おそらくブツダグヒヤは、当時のチベット政府の仏教統制政策への配慮から、意識的にタントリズムへの言及を避けたのではないか。あるいはチベット王室の仏教統制事情を知悉した上で、タントリズムを抑制した形でチベット王室に提供・献上したという推測もあり得よう。『一切儀軌集』や『金剛頂タントラ』、さらに『サマーヨーガタントラ』はその抑制しきれなかった部分の表出であると言える（これらはいずれも『理趣経』系の文献から影響を受けている）<sup>29)</sup>。8世紀半当時の王室仏教においては密教経典の訳出が禁止され、当時における密教許容の限界点を示す『デンカルマ目録』には『大日経』及び『大日経略釈』はリストに挙げるが、『真実撰経』及び、ほぼ同時期にチベットに送られたはずの『タントラ義入』は記載していない。しばらく後に、タントラの訳出が進んだにせよ、中にはついに訳出されずじまいか、散佚してしまったタントラもあったにちがいない。『一切儀軌集』や『金剛頂タントラ』、『サマーヨーガタントラ』はそうしたタントラの1つであったと思われ、それらはブツダグヒヤのタントリズムに大きな影響を及ぼしながら、チベットにおいては王室仏教の密教規制によって排除され、時代の中で雲散霧消し、またときに彼自身の思想の内部においてさえも隠されてしまっているのである。

### 註

- 1) 越智淳仁「Buddhaguhya の年代考」『印仏研』22-2, 1974.

## ブツダグヒヤのタントリズム (山本)

- 2) 『バシエ』サムイエ寺院創設に関わったバ氏の家伝の書とされるが、多く後代の挿入がある。*Une chronique ancienne de bSam-yas:sBa-bZed*, Stein R.A., Paris, 1961. また最近出版されたものに *dBa' bzhed*, *The Royal Narrative Concerning the Bringing of the Buddha's Doctrine to Tibet*, Translation and facsimile Edition of the Tibetan text, by Pasang Wangdu and Hildegard Diemberger with a Preface by Per K. Sørensen, (Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien 2000) があり、これにはブツダグヒヤ及びブツダシャーンティの記述がない。この研究書によれば前者の Stein 本は 14 世紀頃、後者は 11 世紀頃の編纂とされる。
- 3) その他の説を挙げれば、津田眞一氏がチベットとの接触年代を 780~800 年とする (Shinichi Tsuda, *Classification of Tantras in dPal brtsegs's lTa bañi rin pa bśad pa and Its Problems*, 『印仏研』13-1, 1965)。また長沢実導氏は生存年代を 680~760 年 ~ という説をとる (長沢実導『瑜伽行思想と密教の研究』1978, p.14)。松長有慶氏は 8 世紀とする (『梵語仏典の研究』IV、「序論」1989)。また磯田熙文氏は 800~900 年頃とする (磯田熙文「仏教タントリズムの展開 (序) —菩提心に視点をおいて—」『密教体系』第3巻、p.297)。
- 4) このカテゴリーは HODGE Stephen, *THE MAHĀVAIROCANĀBHISAM-BODHI TANTRA WITH BUDDHAGUHYA'S COMMENTARY*, London, 2003, p. 541 に少し手を加えたもの。
- 5) 拙論「ブツダグヒヤの教学背景—『大日経』註釈における引用例を中心として—」『智山学報』第50輯、2001。
- 6) 越智淳仁「Buddhaguhya の Tantra 分類法」『印仏研』21-2, 1973。
- 7) 「個別」(bye brag) は伊藤堯貫氏 (『金剛手灌頂タントラ』の一考察) 『智山学報』第43輯、1994) の訳語にしたがった。サンスクリットは不明で、viśeṣa などが一般だが、つまり所作でも瑜伽でもない「種々の特異なタントラ」の意と思われる。ちなみに酒井真典氏は「分別タントラ」、越智淳仁氏は「個々のタントラ」と訳している。
- 8) アーナンダガルバ『一切悪趣清浄威光王如来応供正遍智細軌註』(Toh2628 / Ota3455) 中に「一切悪趣清浄三身頂髻大タントラ」(D.1b / P.2a) とい

う呼称がある。

- 9) 酒井真典「金剛頂経の第三会」『酒井真典著作集 第三巻 金剛頂経研究』1985. / 桜井宗信「*Vajraśekhara* tantra の一考察」『智山学報』第35輯、1986. / タントラ仏教研究会『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』和訳(1) (2) (3) 『密教學』第35、36、37号、1999, 2000, 2001.
- 10) 『金剛頂タントラ』D.156b-157a. 以下、桜井宗信 *op.cit.*, pp.43~44 にその引用箇所がすべて指摘されているのでそれに拠った。
- 11) 『金剛頂タントラ』D.147a-147b.
- 12) 『金剛頂タントラ』D.167b
- 13) 酒井真典 *op.cit.*, p.134.
- 14) 桜井宗信 *op.cit.*, p.45
- 15) アティージャ『菩提道灯細疏』(Toh3948 / Ota5344) は『一切儀軌集』(*rTog pa kun las btus pa*) を儀軌タントラとして挙げている (D.287b / P.332b)。
- 16) 芳村修基『インド大乘仏教思想研究—カマラシーラの思想—』1974, pp.146~147.
- 17) 『デンカルマ目録』(芳村 No.319)。偈数は記さないが、『金剛手灌頂タントラ』と巻数が同じなのでこれと同程度の分量 (3600 偈) であろう。
- 18) 羽田野伯猷『チベット・インド学集成』第2巻、1987, p.41.
- 19) 酒井真典『大日経の成立に関する研究』1962, p.225.
- 20) 羽田野伯猷 *op.cit.*, p.37.
- 21) 桜井宗信 *op.cit.*, p.46.
- 22) ヴィマラミトラの伝記については、大八木隆祥「*Vimalamitra* 造『聖般若波羅蜜多心広疏』に見られる『大日経』」『密教文化』第208号、2002, p.88 に要領よく紹介されている。また金子英一「ヴィマラミトラの伝承」『宗教と文化』1990 を参照。
- 23) 『チベット文化史』D. スネルグローブ/H. リチャードソン著、奥山直司訳、1998, pp.89-135.
- 24) 拙論「ブツダグヒヤの論書序文に見られる定型的表現について」『智山学報』第52輯、2003.
- 25) 金子目録によればニンマ派におけるブツダグヒヤの翻訳は以下である。

## ブツダグヒヤのタントリズム (山本)

① 『一切仏平等瑜伽タントラ王』(金子目録 No.207)

② 『吉祥秘密集会大タントラ』(金子目録 No.212)

③ 『吉祥勝初大乘儀軌王』(金子目録 No.213)

その他に、金子目録 No.356, No.360 などがある。

26) 田中公明「敦煌出土のニンマ派密教典籍について」『チベットの仏教と社会』1986.

27) 田中公明氏によればシャーンタラクシタ作『真実成就』(*Tattvasiddhi*)中に『サマーヨーガタントラ』からのパラフレーズが見出されるという。

28) 拙論「『大日経』所説の本尊瑜伽について—特に *Samāyogatantra* の引用をめぐって—」『密教学研究』第35号、2003.

29) 乾仁志「『金剛頂タントラ』所説のマンダラについて (I)」『高野山大学論叢』第32巻、1997.

【キーワード】ブツダグヒヤ、タントラ分類法、一切儀軌集、金剛頂タントラ